

『河海抄』の研究（一）

—「序」—

徳 満 澄 雄

（昭和六十二年十一月十一日受理）

『河海抄』は、貞治（一二三六—一二八八）の初め、四辻善成が足利義詮の命に依って撰献し（『珊瑚秘抄』奥書）、後年まで覆勘を加えて成った（『河海抄』一本奥書）『源氏物語』の注釈書である。

著者、四辻善成は、順徳帝四世の裔で、嘉暦元年（一二三六）に誕生し、応永九年（一四〇二）九月三日、七十七歳で薨じた。従一位、左大臣（曇華院蔵『通玄寺志』）となる。

『河海抄』は、中世以来、現代に至るまで、源氏物語研究の聖典として不可欠の注釈書であるが、諸注集成の性格が濃く、さまざまな説が未整理の状態で収載されており、そのため、前後文章が矛盾した箇所や出典名その他に異同が見られ、また、転写の間に誤脱が生じて、現存写本は、このままでは読解困難、または不可能である文章が多い。

小稿では、可能な限り、『河海抄』の引用文献に直接当たり、諸本を校合して、注釈本文を復元しようと試みた。なお、注記の意味・意図・伝流・正謬などについて考察を加えようと思う。

底本には、玉上琢弥編^{山本利達}石田穰^二校訂『紫明抄・河海抄』（角川書店）を用いる。この本は、天理図書館蔵、文禄五年（一五九六）書写本に基づき、桃園文庫蔵本（阿波国文庫・不忍文庫旧蔵）と、天理図書館蔵五冊本（真如蔵）を用いて校異を示している。「不本……」とあるのは前者で、「真本……」とあるのは後者である。また、（ ）内は、真如蔵本のみによって補った箇所を示している。

河海抄序

「光源氏物語は寛弘の初めに出来て、康和の末に広まりにけるより、世々のもてあそび物として所々の枕ごととなれり。」

（私に、表記法を改め、句読点・濁点などを加えて読み易くした。以下、同じ。）

（一）『源氏物語』の書名を、『光源氏物語』と称した例は、すでに、『源氏一品経』『原中最秘抄』『紫明抄』『吾妻鑑』に見られる。

『源氏物語』に「光」を冠する理由として、『紫明抄』（桐壺）に、

おほよそ、源氏物語といふ物あまたある中に、光源氏物語といふは紫式部君のしわざなり。

とあるが、『河海抄』（料簡）では、

或説に云ふ。此の物語をば必ず光源氏物語と号すべし。いにしへ、源氏といふ物語あまたある中に、光源氏物語は紫式部が製作也^{云々}。

是、今案之儀歟。

と、疑っている。

『源氏物語』には、右のほか『源氏』『光源氏』『源氏の物語』『紫の物語』『紫のゆかり』（若紫巻か）という呼称がある。『紫式部日記』に、

。うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに

。源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、とあり、『更級日記』には、

。その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、(「光源氏」を人名とみる説がある)

。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、

。源氏の五十余巻、櫃に入りながら、

。心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、

。紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、と書かれてゐる。

右掲の例から察するに、『源氏物語』は、作者生存中、すでに「源氏の物語」と呼ばれ、その後、主人公、または女主人公(藤壺・紫の上)にちなんで、異称が生じていたことがわかる。

「源氏」とよばれる物語がたくさんあって、その中で『光源氏物語』は紫式部の著作であるという説は、その証跡がなく、信じがたい。

(二)『源氏物語』の成立を寛弘の初めとし、その流布を康和の末とする説は、『弘安源氏論義』(跋)にすでに提示されている。

此の物語、ひろくひろき年のほどより出で来にけり。しかれども、世にもてなすことは、すべらぎのかしき御代には、やすくやはらげる時よりひろまり、くだれる直人の中にしては、宮内少輔が「釈」よりぞあらはれける。(括弧内の傍記は筆者)

『源氏物語』の成立を寛弘(一〇〇四～一〇一〇)の初めとする説は、前掲『紫式部日記』の記事に、『源氏の物語』の書名が見え、この記事は、『紫式部日記』が執筆されたと推定される寛弘七年(一〇一〇)以前のことであるから、そのころまでに、『源氏の物語』と呼ばれる物語が存在していたことは確実であって、首肯することができる。

しかし、その『源氏の物語』は、現存する『源氏物語』そのものか、また、ほぼ同一のものか、あるいは、ほぼ同一のものであったとしても、どの巻までがどのような順序で執筆されていたかなどの問題については、

諸説がある。「構想論」「構造論」「成立論」「生成論」といわれるものがそれで、戦前の阿部秋生の論を嚆矢として、戦後の昭和二十六年ごろから、池田亀鑑・武田宗俊らの論文によって構想論が活発となり、多くの研究者の参加によって多彩な論争が展開された。しかし、どの立論も決定的証拠をあげることができず、昭和五十年代に入ると次第に下火になった。ともあれ、この論争によって、各巻々の特徴がいつそう明らかとなり、本文の読みが深まったことは否めない。

(三)『源氏物語』が康和(一〇九九～一一〇三)の末から流布した、とするこの説は信じがたい。

寛仁元年(一〇一七)頃、任国上総に下った菅原孝標の家庭で、光源氏のことを、『更級日記』の著者菅原孝標の娘は継母(高階成行女・上総大輔)や姉から聞いており、また、治安元年(一〇二二)には「紫のゆかり」を手に入れ、ついで、受領層に属すると考えられるおばから、『源氏の五十余巻、櫃に入りながら』頂戴して耽読している(『更級日記』)。この事実によって、すでに後一条天皇の時代には受領層の家庭にまで『源氏物語』が流布していたことがわかる。「五十余巻」は、現存巻数の五十四巻か、五十巻以上(六十巻説がある)か、解釈の分かれるところであるが、『更級日記』に『源氏物語』の始めの方に登場する夕顔、後の方に登場する浮舟の名が見えていることによって、治安元年(一〇二二)には、内容上、現存の『源氏物語』とほぼ同様なものが流布していたと推定されている。

ただし、『更級日記』の作者の父孝標は菅原道真五世の嫡孫であり、兄、定義は文章博士・大学頭を経ており、叔母は『かげろう日記』の作者藤原道綱母であって、学問・文芸と密接な関係を有する家柄であることから、『更級日記』の作者が受領層のおばから「源氏の五十余巻」を入手できたことは特例であると考えられることもできよう。

しかし、白河朝(一〇七三～一〇八五)の頃、六条斎院家の女房宣旨によって書かれたと推定される『狭衣物語』には、『源氏物語』の宇治十帖の

影響が顕著に見られるから、『弘安源氏論義』『河海抄』の康和末流布説は時代が下り過ぎていると考えられる。

ただし、康和(二〇九九—二〇三三。堀河天皇治世)時代前後には、『源氏物語』の影響を強く受けている『浜松中納言物語』(十二世紀中頃の成立)・『夜の寝覚』(十一世紀後半の成立)・『とりかへばや物語』(十二世紀中頃の成立)・『堤中納言物語』の『逢坂越えぬ権中納言』・『篋物語』・『栄花物語』続編十巻が成立しており、康和の末には『源氏物語』が広く流布し、深く味読されていたことがわかる。

(四)「枕ごと」は、日常の話の種。「ただその筋をぞ枕ごとにてせさせたまふ」(桐壺)

その中に、中納言定家は、卷々に難義を注して、『奥入』と名付け、大監物光行は、家々の口伝を抄して『水原』と号せり。しかあるのみにあらず、伏見仙院、坊におはしましし時、問題を左右に奉らしめて論談の勝ち負けをあらそはせられ、後醍醐院、御位のはじめ、彼の梨壺の歌仙に仰せて、『万葉集』を読み解かしめし例をうつされけるにや、黒戸の人数をさだめて、五十帖を講(不本五十四帖)せらるる儀ありしに、先師忠守朝臣、七つの流の底の心を究め、九重(こゝろ)の中の撰に応ぜしかば、しきりに顧問にあづかりて、しばしば秘説を奏しき。

(一)以下、『源氏物語』の研究史を述べている。

『弘安源氏論義』(跋)は、「くだれる直人の中にしては、宮内少輔が『釈』よりぞあらはれける」と述べ、『源氏物語』研究の嚆矢を宮内少輔藤原伊行(二条・六条・高倉天皇治世八一—一五八八〇〇治世の人)の『源氏釈』(伊行釈)とするが、『河海抄』は、上述のように、『弘安源氏論義』の源氏物語の成立・流布説に従いながら、ここでは、『源氏

釈』の「源氏物語研究嚆矢説」を無視して、藤原定家の『奥入』を劈頭(はなは)に置いている。

『奥入』には、後に述べるように、『源氏釈』の注記を、「伊行朝臣」「伊勘」「伊行」と標記して引用しているから、『奥入』のほとんど全部を収載している『河海抄』の著者は、『源氏釈』(伊行釈)の存在を知っていたはずである。

また、次にあげる例でも判明するように、『河海抄』の著者自身、『源氏釈』(伊行釈)を実見しているのである。他書からの孫引きではなく、著者が『源氏釈』を直接引用している証を次に示そう。

○しものちの夢とずし給ふ(須磨)

(源氏釈) 胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸(前田家本)

(奥入) 王昭君 朝綱卿

翠黛紅顏錦繡粧 泣尋沙塞出家郷

辺風吹断秋心緒 隴水流添夜淚行

胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸

昭君若贈黄金路 定是終身奉帝王(定家目筆本)

(返り点・送り仮名省略)

(紫明抄) 『奥入』に同じ。△角川書店本

(河海抄) 胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸 王昭君。伊行尺には血の涙と誦し給とかきて、下和玉也と尺せり。僻事也。詞にも胡のくに、つ

かはしけん女をおぼしやりてとあり。王昭君事也。△角川書店本

右の『河海抄』注記に「伊行尺には……王昭君事也」とある箇所は、現

存『源氏釈』(△第一次本一類▽『源氏或抄物』『北野本断簡』、△同二類本▽『書陵部本』。△第二次本▽『前田家本』。△増補本▽『吉川家本勘物』『都立中央図書館本』中、『書陵部本』のみに見られる「血の涙」とある物語本文に付けられた長文の注記を、『河海抄』の著者が要約して、反論を加えたものである。これによって、『河海抄』の著者が見た『源氏釈』は、現存写本の代表と目される『前田家本』の祖本より古い段階の、『書陵部本』系

統の本であったことがわかる。

しかし、伊行の注釈は、池田亀鑑（注）の説によれば、現在見るような一冊子本の形態ではなく、『源氏物語』各巻の本文に、頭注・傍注・脚注・あるいは付箋として、注記が内容豊富に記入されていた、と考えられているので、『河海抄』に見られる「伊行朝臣勘」・「伊行」などと標記する注記を、『河海抄』の著者が現存本『源氏釈』のような一冊本から引用したと限定して考える必要もないことになる。

一方、『河海抄』序が次の段で掲げる「伏見院論義」（弘安源氏論義）の中に、「宮内少輔が釈」の名が見えるので、『河海抄』成立以前に、宮内少輔藤原伊行の注釈は、一冊本にまとめられていたとも推定することができると。

『河海抄』の著者が、『序』において、伊行の注釈を知らながらこれを無視して、藤原定家の『奥入』を源氏物語研究史の劈頭に置いたのはなぜか。その理由について、定家の文学者としての權威が伊行に比して圧倒的に強かったことなどが考えられるが、真相は不審である。

(二)『奥入』は、藤原定家が『源氏物語』各帖の奥(末尾)に、旧注を取捨選択し、また、自説を追加して書いていたものを、天福元年(一一三三)以後、切り出して別冊としてまとめた注釈書である。各帖の奥にあった注記を書写したものと、別冊を書写したものとの二系統がある。定家自筆本の奥書によれば、定家が切り出した時、歌など多く切り失ったというが、総数約四七〇項の注釈を収めている。重松信弘著『新源氏物語研究史』によれば、『源氏釈』の和歌・歌謡・詩文・仏典等の引用四百数十項の中、『奥入』は約二割弱を除いて二割強を補い、また、『源氏釈』の有職故実・典拠等の事項約二十項のうち、『奥入』は約半数を除き、新たに三十余項を追加しているという。

『奥入』は『源氏釈』に比して、引歌・引詩・有職故実などの典拠を明示し、引歌の適否を厳密に考察していることなどに特色がある。また、巻名の異名・年立について言及している箇所があつて注目される。

(三)『水原抄』は散逸していて、その正体をはっきりとは把握しないが、『原中最秘抄』の正和二年(一一三三)八月十五日に聖覚(俗名、義行)が記した跋文によれば、源光行(寛元二年八一二四四〇二月十七日没)は『源氏物語』を研究し、後京極撰政良経、久我太政大臣通光、後徳大寺左大臣実定、五条三品俊成などの助力を得て、『水原抄』の草案を書いてしたが、亡くなったので、その子親行(文永九年八一二七二〇頃、没か)が、その仕事を引き継いで完成させたという。親行の説が、弘安三年(一二八〇)十月六日、東宮(伏見天皇)の御所で催されたたことがわかる。

『水原抄』の説は、『原中最秘抄』『紫明抄』『雪月抄』『河海抄』によってその片鱗を窺うことができる。七海本・吉田本『源氏物語古註』は、『水原抄』であろうかという説（池田亀鑑）があるが、この本は『水原抄』と同系統の注釈書である『原中最秘抄』と異なる注記を付している箇所もあって、『水原抄』と同じものかどうか、疑わしい。

(四) ここは『弘安源氏論義』について述べている。『弘安源氏論義』の序・跋文によれば、弘安三年（二二八〇）十月六日、伏見天皇が東宮の時、御所で、『源氏物語』の難義について、歌合せの形式を模して左右にわかれて論議し、判者が勝負を決したことがあったが、その記録を源具顕が同年十月二十二日に作り、『源氏の論義』と名づけた、という。

論議に出席した人は、左方が、藤原雅有・同範藤・同長相・源具顕、右方が、藤原康能・同兼行・同定成・同為方、計八人。問題は、「童隨身」「大藏卿藏人理髮」「某院」なにがいにん「吉祥天女」云々「大將の仮隨身」「月影ばかりぞ」云々「女御更衣」「わかんとほり」「もろこしのきこえ」「並びの巻」「かはふえ」「朱雀院の御賀」「あをむま」「とりのせうやう」「よもぎふの露を」云々「致仕のおとど」の、語義・文意・准拠・引歌・有職故実に関する十六番がある。

(五)『仙源抄』(長慶天皇著)の「呂リョのうた」の項に、「愚案、定

本には律とあり。それにつきて、延元宸筆(注、後醍醐天皇筆)にて『梅が枝・此殿は、呂歌勿論也。律はかうしもあはぬを、呂よくあひたるといへる也』としるしつけさせ給へり。此説を可用也」とあり、また、奥書にも「先皇之御草本」「先皇御抄」とあって、延元(一三三六―四〇)時代、後醍醐天皇宸筆の『源氏物語』注釈書が存在したことが判明するが、『河海抄』のこの部分はこの注釈書が成立する過程について述べている。「後醍醐院、御位のはじめ」は、文保二年(一二三二)より数年間。

(六)「梨壺の歌仙」は、天曆五年(九五二)、村上天皇妃の広幡御息所が『万葉集』に訓点を付すために、はじめて昭陽舎(梨壺)に和歌所を置き、同時に『後撰和歌集』撰集の事業を行なったが、その時に集まった五人の寄人(清原元輔・紀時文・大中臣能宣・源順・坂上望城)を指す。「後拾遺和歌集」序などによる)

(七)「黒戸」は、黒戸の御所。清涼殿の北・瀧口の戸の西にある部屋。「人数を定めて……」とあるが詳細は不明である。

(八)「先師忠守」は、『作者部類上』や『尊卑分脈』によれば、左京大夫、典薬頭、施薬使、正四位下、院昇殿丹波長有の次男。宮内卿、典薬頭、施薬使、左京大夫、内院昇殿、正四位下。歌人、寂阿。子孫なし、とある。

『増鏡』第十三「秋のみ山」(注二五)に、後醍醐天皇元亨元年(一二三二)八月十五日、安福殿の歌合せの際、「忠守などいふ医師も、この道の好き者なりとて、「召し加へらる。」とある。

また、『新統古今和歌集』雑・中・一九一一・一九一二番に、

源氏物語の揚名介の事を忠守朝臣に尋ね侍るとて申しおくりける

藤原雅朝朝臣

つたへおく跡にもまよふ夕がほのやどのあるじのしるべともなれ

返し

丹波忠守朝臣

心あてにそれかとばかりつたへきてぬしさだまらぬ夕がほの宿

とある。

雅朝は、「尊卑分脈」によれば、飛鳥井定有の子、雅経の曾孫であるが、『二十一代集才子伝』によれば、「参議雅有の子、(中略)或云、雅有之弟丹後守定有の子也」とあって系図上不明な点がある。

雅有は、『弘安源氏論義』に、

又、いまのよには、三つのくらゐ藤原雅有なん、源氏のひじりなりける。これは君も臣もみなゆるせるなるべし。

とあり、当時、源氏物語研究の第一人者であった。雅朝は、雅有の子であっても定有の子であっても、いづれにしても源氏物語研究の権威ある家柄の人であるから、この人から、夕顔巻の秘伝の一つである「揚名介」のことを尋ねられた丹波忠守も、当代一流の源氏研究者であると見ることができ。

また、雅朝は、「揚名介」の秘事を、行阿にも尋ねたことが、『原中最秘抄』の跋文に次のように見える。

元弘雅朝 揚名介秘説事可相伝之旨、頻被懇望之時、贈一首云
おぼつかな其名をたれと夕がほの花のあるじの行えしらせよ

返し

あるじをば誰ともいかで夕がほの花の其名をしらせずも哉
右の事実から、忠守は、河内学派の正統な継承者であった行阿と比肩する学匠であったことがわかる。

丹波忠守朝臣が「七ツの流のその心を究め」、「九重の中の撰に込ぜしかば、しきりに顧問(御タツネ)にあづかりて、しばしば秘説を奏しき」という記事は、前述の後醍醐天皇、元亨元年(一二三二)前後のことを叙したものであるが、詳細は不明である。学統上、忠守は、『珊瑚秘抄』(四辻善成著)に、「祖師義行先師忠守朝臣、施一卷、仍不及重記」とあるから、光行・親行・義行(聖覚)と続く河内方の学統にあることがわかる。

しかし、『河海抄』の上掲記事に従えば、忠守は、諸学派を総合的に

継承していることになり、この総合主義的な学問の方法が、『河海抄』の諸注集成とその批判という学風を形成していったと考えられる。

ここで疑問となるのは、『河海抄』は『紫明抄』の注記のほとんどすべてを、同文のまま引用して掲載し、わずかではあるが、説の所在を示すために、『素寂紫明抄』『素寂抄』『素寂説』『素寂云』『素寂』と付記しているにもかかわらず、『序』に『紫明抄』の名を挙げていないことである。

『紫明抄』の著者素寂は、^{注二七}『紫明抄』の中に「亡父大監物光行」「舎兄親行」とあるから、『水原抄』の著者である源光行の息子であり、親行の弟である。従って、その学統は同じ「河内」方で、『水原抄』と『紫明抄』の注記は大同小異であったかとも考えられるが、たとえば、『河海抄』(須磨)に、
○いちはやき世の ^{イハヤキ}最強

伊勢物語に「いちはやきみやびをなんしける」とあり。

親行云ふ、「すみやかなる心也」水原

素寂云ふ、「すくれたるといふ詞也」紫明抄(私注、京大本『紫明抄』と同文)

之を案するに、急なる心歟。「早」の字也。「いち」は、「最」也。「いちじるし」なども云ふ也。

とあり、『水原抄』の注記と『紫明抄』の注記は異なる箇所もあったことがわかる。また、素寂の独自説も存在しており、『河海抄』(紅葉實)の「人のみかどまでおぼしやれる御后詞の」の項では、『紫明抄』が、継母后と子が密通した史実として、則天武后と高宗の関係を挙げているのを、「一説云 素寂説紫明抄」として引用し、『河海抄』の著者がこれに鋭く反論を加えているところがある。

右の例からも分かるように、善成は『紫明抄』の注釈を、引用または批判の対象として活用しているのであるが、『序』に、『紫明抄』の名を特記しないのは、河内方の学統を『水原抄』で代表させ、同じ学統に

あっても『紫明抄』のように異説を唱える注釈書は、「七つの流」の中に含めて考えていたのであろうか。

また、『原中最秘抄』の名も『序』に見えないが、『河海抄』には、たとえば、「若紫巻」に、

○あづまをすがゝきてひたちには田をこそつくれといふ哥を

(1) ひたちには田をこそつくれたれをかね山をこえ野をこえ君があまた ^{風俗常陸歌} ^{きませる}

(回) あづまは和琴の惣名なれども、又東調とて秘曲あるなり。

(イ) 常陸歌、風俗の秘事四首の其一也。東調にてすがゝきて、此哥をうたふ也。今世に知れる人稀れ也 ^{云々} (1)(回)は、私に加える)

とあるが、(1)は『伊行釈』『奥入』『紫明抄』『原中最秘抄』共にこれを載せており、(回)については、左記のように『原中最秘抄』に初見の同趣注記が存する。

あづまと申す名は、和琴をばただ申せども、是、東調と申して、道の秘事也。ひたちには田をこそ作れは、風俗の秘事四首内、第一なり。あづまのしらべにてすがゝきて此の風俗をばうたふ事にて候ふを、今は委しく知りたる人も稀なるにや。(私に、句読点、送り仮名を付す)

『河海抄』と『原中最秘抄』の右掲記事を対照してみると、『河海抄』は『原中最秘抄』の注記本文をそのまま引用してはいないものの、両書の注記は密接な関係を有しているということができる。

『原中最秘抄』は書名に顕著に示されているように、秘伝書であったから、『河海抄』の著者の目に直接触れることはなかったが、『河海抄』は、河内学派の秘説を包摂していることは明らかで、この秘説を『水原抄』から吸収することができたのではないか。従って、『水原抄』を実見し、その注記本文を直接引用できた『河海抄』の著者は、『原中最秘抄』の存在を知らなかったか、または知っていても、『水原抄』と同類の注釈書として、ことさらにその書名をあげる必要を感じなかったか、とも考えられる。

(九)「七ツの流」とは、先師忠守以前に、七つの学統があったことを示すが、定家系の学統と河内方の学統(親行—聖寛の流れと、親行—素寂の流れの二つに分かれたと稻賀敬二氏は考えておられる)、および『弘安源氏論義』に、「伊行が流」と称されている藤原定成の学派の合計四流が、現在知られているのみで、「七ツ」の学統の実態はわからない。しかし、『弘安源氏論義』や『原中最秘抄』その他に、家々の口伝・秘説の類が多く掲載されている事実に基づき、当時、秘伝意識によって多数の流派が形成されていたものと推定することができる。(田坂憲二「中世源氏物語享受史の一面——『原中最秘抄』を中心に——」『語文研究』64号・昭62・12頁参照)

(一〇)「九重」は、宮中の意と、九回の意を掛ける。「七ツ」の対句。「撰」は、書物を編集する。この時、作られた注釈書は、『仙源抄』の基になった本か。

(一一)「顧問」は「顧問」と同義。天子が臣下を顧みてその意見を聞くこと。

ここに、なまじるに、わかむどをりのすゑをうけて、はるかに惟光・良清が風を慕ふいやしき翁あり。桂をおる道を学びし昔より、惟が本の宿りをたづぬる今に至るまで、緑の袖の色のかはらぬ嘆きを忘れて、紫の筆の跡に染むる心ざしをあらはさんとす。この故に、中葉の林にあそびて、直くゆがめるを分かち、前修の海をくみて、深き浅きを定む。をのづから、いはねの松の人しれぬことの葉ひろひて、わつかに、軒端の萩の穂に出だすべきかごととせり。あつめて二十巻とす。名づけて『河海抄』といふ。もとより、窓の螢を睡びず、枝の雪を慣らさざれば、浅く見、寡く聞ける嘲りを恥づといへども、故を温ねて新しきを知る媒とせんがために、いささかこれを記すといふことしかり。

(一)「わかむどをり」は、秘説の一つ。『河海抄』に、王家無等倫。

うつばの物語に云ふ、あて宮の御めのとご一人はわかむどをり、一人は大弐の子。

王孫を云ふ也。王の字をかくべし。経にも、世雄無等倫 妙智無等倫などいふがごとし。

『弘安の源氏論義』にも、親行説とて、今の義を証義に定められぬ。

一説、我無等倫、又云ふ、和漢通和漢云々。

『弘安源氏論義』には、八番問(具顕)に対する答え(為方)に、

わかむどほりは、古来の難義なり。ただし、家々の説おほしといへども、伊行・定家の難義について心得るに、王孫といへるさらに相違なし。たがへる所なきによりて、他の説を問ひ、沙汰するに及ばず。

とあり、さらに、具顕の意見として、

委しく釈したる義あらば申すべきよし、仰せ出ださるるにつきて、

親行が釈するところの王家無等倫、『史記』殷本紀に、王家をおさむといへり。『法華經』化城喻品に、世雄無等倫といふ事あり

(以下略)

と記されている。

右の親行説は、『原中最秘抄』に、同趣旨の注記がある。

しかし、『岩波古語辞典』によれば、

隋書、倭国伝に「王妻号難彌、後宮有女六七百人、名太子為和歌彌多弗利」とある。「わか」は、「わうか(王家)」の転、「んどほり」は「み(御)とほり」の転で、王家の筋の意か。

とある。『源氏物語』末摘花巻に、「(大輔の命婦ハ) わかんどほりの兵部の大輔なるむすめなりけり」とある。

(二)「惟光・良清」は、ともに光源氏の側近の従者。「惟光」は夕顔巻に、「良清」は若紫巻に初出。『河海抄』の撰者名は、正六位上物

語博士源惟良となっているが、これは源氏と惟光・良清の名を合成したものである。

(三)「いやしき翁」は、四辻善成の謙称。善成は、応永二年(一三九五)七月二十日、任左大臣。順徳天皇皇孫尊雅王の子。『通玄寺志』『尊卑分脈』

(四)「桂をおる道」は、官吏登用試験に、文章生が及第することをいう。『源氏物語』藤裏葉巻に、藤典侍が夕霧に返した歌「かざしてもかつたどらるる草の名は桂を折りし人や知るらむ」とある。参考歌、『拾遺集』・雜上・四七三番。出典、『晋書』郗詵伝。「詵対して曰く、『臣、賢良対策に挙げられ、天下第一となる。なほ、桂林の一枝、崑山の片玉のごとし』」

(五)「椎が本の……」は、八の宮の死後、宇治を訪問した薫の歌、「立ち寄らむかけとたのみし椎が本むなしき床になりけるかな」(椎本)へこの歌の本歌は、「優婆塞が行なふ山の椎が本あなそばそばし常にしあらねば」(『宇津保物語』嵯峨院・菊の宴の巻)である。√在俗のまま、仏道修行をこころざす今にいたるまで、の意。

(六)「緑の袖の色の……」は、乙女巻で、夕霧が六位(緑色の袍を着る)であることを嘆いたことに因んだ表現。「緑衣」と「六位」は、音が通うことと、六位の者は袍の色が緑色であったことから、いつまでも殿上人(五位以上、および六位の藏人)になれないことを嘆くことをいう。善成は、左大臣従一位に昇ったが、『河海抄』の撰者名は、「正六位上物語博士源惟良」と謙称しているの、このように言う。

(七)「紫の筆の跡」は、紫式部が著わした『源氏物語』を指す。

(八)「中葉の林」は、中期のたくさんの源氏物語研究を指す。善成にとって「中葉」とは、鎌倉時代のことである。

(九)「前修の海」は、先賢の広く深い源氏物語研究を指す。「中葉の林」と対句になって、先学者たちの広く、深い源氏物語研究を讃える。

(一〇)「いはねの松」は「岩根の松」と「言はねの松」を掛ける。「たが世にか種はまきしと人とはばいかがいはねの松はこたへむ」(柏木)。

「命あらばそれとも見まし人知れずいはねにとめし松の生ひすゑ」(橋姫)による。ことさら言はないでもよい自説の意と、岩根の松のように不変な自説の意を掛ける。

(一一)「軒端の荻の穂……」は、「ほのかにも軒端の荻を結ばずは露のかごとを何にかけまし」(夕顔)による。

(一二)「かごと」は、かこつける言葉、の意。言い訳。口実。弁解。「中葉の林……かごととせり」は、先行注釈を広く集め、その注釈の正誤を見定め、あわせて自説を加えた、の意味である。『河海抄』における、諸注集成のあり方と先行注釈批判および独自注の研究方法については、小稿『河海抄』における四辻善成の独自註について」(北九州工業高専研究報告)第五号・昭47・1)がある。『河海抄』においては、諸注集成の方に努力が傾注され、批判説および独自注はきわめて少ないが、その中に、善成の学統にとらわれず、「諸事やすきを以て正説」とする自由な研究精神が窺われることを論じたものである。

(一三)「河海抄」という書名は、「泰山は土壤を譲らず。かかるが故に能くその高きことを成す。河海は細流を厭はず。かかるが故に、能くその深きことを成す」(『和漢朗詠集』)による。出典は、『史記』巻八十七・李斯列伝第二十七である(小異あり)。

(一四)「窓の螢」は『晋書』車胤伝による故事。「車胤、字は武子。幼にして恭勤博覧。貧して常に油を得ず。夏月、練囊を以て、数十の螢火を盛り、書を照らして之を読む。夜を以て日に継ぐ。後に、官は尚書郎に至る」

(一五)「枝の雪」は、『晋書』孫康伝による故事。「孫康少くして清介、交游難ならず。家貧にして油なし。嘗て雪に映じて書を読む。後に官は御史大夫に至る」。源氏物語・少女巻の「窓の螢をむつび、枝の雪をならしたまふ心ざしのすぐれたるよしを」による。

(一六)「浅く見、寡く聞ける」は、「浅見寡聞」の訓読み。知識が浅く狭いことをいう。

(一七)「故を温ねて新しきを知る」は、『論語』為政篇の、「子曰く、故きを温ねて新しきを知る。以て師為るべし」による。また、『漢書』百官公卿表に、「略、大分を表挙し、以て古今に通じ、故を温ねて新しきを知るの義に備ふと云ふ」とある。

(一八)「といふことしかり」は、「云爾」(しかいふ)を強めた表現。文末に用いて、上の文を収めることは。

〔現代語訳〕

『光源氏物語』は、寛弘のはじめに創作され、康和の末に流布して以来、各時代の人々の心を慰めるものとして日常の話題となった。

その中で、中納言藤原定家は、巻々に、難解なことを注釈して書き入れ、それを『奥入』と名付けた。また、大監光源光行は、各家に口伝で継承されている秘説の要点を書き留めて、『水原』と命名した。そのほかに、伏見上皇は、まだ皇太子であらせられた時、歌合わせの形式に従い、人びとを左右に分けて、解釈上の問題箇所を提出させ、議論の勝負を争わせられた。また、後醍醐天皇は、即位の当初、かつて、村上天皇がかの梨壺の五人の歌仙に命じて、『万葉集』を解説させられた先例に倣われたのか、黒戸御所に人数を定めて人々を集めになり、『源氏物語』五十四帖を解釈なされた事があったが、私の亡き師である丹波忠守朝臣は、源氏物語研究の七つの流派の説を徹底的に研究し、宮中で『源氏物語』の注釈書を編纂する際に何度も質疑に応答したので、天皇の御下問を頻繁に承って、しばしば秘説を奏上した。

ここに、なまじっか、皇統の末裔として生まれ、遙か昔、惟光や良清が光源氏を敬愛した遺風を慕う身分の低い翁がいる。その翁は、官吏登用試験に合格するために勉強に励んでいた若い頃から、在俗のまま仏門に入ろうと願う老境の現在に至るまで、六位のままで官位がいつこうに上らないことも嘆かずに、紫式部の著した『源氏物語』の研究に専念している固い意志を表明しようとしている。そのため、中世の多くの学

説を研究して、その曲直を判別し、先賢の学問を学んで、その深淺を見定めた。一方、言う必要もないような自説を、しぜんに拾い集めて、辛うじて世間に発表するための口実とした。ここに、先学の説や自説を書き集めて二十巻の書物とした。名づけて『河海抄』という。

翁は、元来、螢雪の功を積んだ者ではないから、知識が浅く、狭いという読者の嘲笑を受けるかもしれないが、そのことを恥ずかしく思うものの、「故きを温ねて新しきを知る」ための仲立ちとしようと思つて、すこしばかり書きしるしたのである。

注

- (一)『珊瑚秘抄』奥書に「往日、貞治始、依故宝篋院贈左大臣貴命、令撰献河海抄廿卷」
- (二)『河海抄』一本、「此抄一部廿卷、手自令校合、加覆勘畢、可為治定之証本」
- (三)飛鳥井慈孝編、笠間書院、昭和53年。
- (四)本居宣長『源氏物語玉の小櫛』一の巻「註釈」の項参照。
- (五)『更級日記』冒頭。
- (六)『更級日記』大系本492ページ。
- (七)『更級日記』大系本493・503・522ページ。
- (八)『伊井春樹』源氏物語注釈史の研究』第一部第一章第二節四参照。
- (九)池田亀鑑『源氏物語大成』巻七、第一部第二章第三節参照。
- (一〇)『増鏡』大系本417ページ。
- (一一)『源氏物語大成』巻七・資料篇。
- (一二)素寂の俗名については諸説がある。孝行説(山脇穀・稲賀敬二)、非孝行説(池田亀鑑)、保孝説(『珊瑚秘抄』奥書)、光重説(曾沢太吉)、孝行疑問説(池田利夫)。
- (一三)『原中最秘抄』の成立は、奥書によれば、正和二年(一一三三)八月十五日である。従って、四辻善成が嘉暦元年(一一三二)に誕生する以前に存在していた。